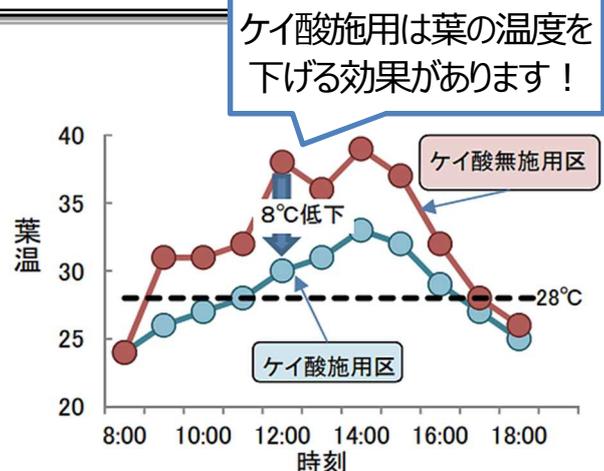


- 収穫後の稲わらはケイ酸や有機物を多く含みます。
秋の早い段階ですき込むことで腐熟が促進され、堆肥と同等の土づくり効果が期待でき、翌年のガス湧きも軽減できます。
- ケイ酸は稲体を丈夫にすることで倒伏に強くなる上、根量の増加により養水分の吸収力が向上し、高温条件下の登熟が向上します。籾がらやケイ酸資材の施用も検討しましょう。

1 早めの稲わら秋すき込みで腐熟を促進

- ・ケイ酸を多く含む稲わらの秋すき込みは、堆肥施用と同等の「土づくり」効果が期待できます。
- ・ケイ酸は稲体を丈夫にし、倒伏を軽減します。また、水分を根から吸収して葉から水蒸気を放出する働きが活発になり、稲体温度の上昇を抑えます(右図)。猛暑時の高温によるデンプン合成阻害の影響が軽減されることで、白未熟粒の発生を抑えます。



高温条件における葉温に及ぼすケイ酸の効果 (金田ら2010, 土肥誌)

2 籾がらもケイ酸供給に有効

- ・籾がらはケイ酸を約 20%含む有用資源であり、土壌を軟らかくする効果もあります。
- ・施用量は「各ほ場から得られた籾がらの量」を基本としましょう。
- ・ごま葉枯病、稲こうじ病、墨黒穂病が多発生したほ場のものは施用しないようにしましょう。



- ・稲わら・籾がらの腐熟の促進を図るため、地温の高いうち(遅くとも10月中旬まで)に完了する。
- ・すき込み方法は5~10 cm 程度の浅うちにする。
- ・浅うちは表面の稲わらが乾燥しやすいので、土壌と十分に混和する。

3 土づくり資材で不足分を補給

- ・ケイ酸、リン酸、鉄が不足しているほ場では、土壌分析・診断に基づいて土づくり資材を施用するとともに稲わらの秋すき込みを行い、効果的・経済的な土づくりに努めましょう。

各地域の土壌特性は柏崎地域土づくりマップ(令和2年9月作成・配布)も参考にしてください。PDF版をHPに掲載しましたので、ご活用ください。



柏崎地域農業振興協議会

お問い合わせ先 柏崎農業普及指導センター (0257) 21-6263
かしわぎき営農センター 21-0220 南部営農センター 41-6087 北部営農センター 45-2258